

氏名	ラーマン アブドゥル		
学位の種類	博士 (音楽学)		
学位記番号	博音第198号		
学位授与年月日	平成23年3月25日		
学位論文等題目	〈論文〉タブラーの唱歌とその伝承		
論文等審査委員			
(総合主査)	東京芸術大学	准教授 (音楽学部)	植村幸生
(副査)	〃	教授 (〃)	塚原康子
(〃)	〃	〃 (演藝芸術センター)	松下功

(論文内容の要旨)

本研究の目的は、タブラーという北インド古典音楽の代表的な打楽器の唱歌が、音楽の伝承の過程で果たす役割について、これまでの自分の学習体験や演奏経験を踏まえて検討することである。

唱歌は、人間が楽器の音を耳で聴き取り、それを言語音に置き換えたものである。例えば、長唄三味線の音は、「トン、チン、リン」などの言葉に置き換えられ、これらは「口三味線」と呼ばれている。同じように、タブラーの音は「ダ」「ディン」「ナ」などに置き換えられ、これらの音は「ボール」と呼ばれている。ボールは、サンスクリット語で「言うこと」を意味する言葉である。

タブラーの唱歌に関する先行研究では、次の3つの点についての検討が不十分であった。それらは①学習における唱歌の役割②演奏における唱歌の役割③伝承様式の変化と唱歌学習である。ここでそれぞれについて本論でどのように検討したかを述べる。

まず学習における唱歌の役割である。これまでに、タブラーの学習過程に関する研究がいくつか行われてきた。しかし、そこでは文化的な側面についての人類学的なアプローチからの研究が主になっており、学習の過程で唱歌が果たしている役割や、学習者が唱歌の組み立て方をいかに身につけるのかという点については詳細に検討していなかった。本研究では、私自身がタブラーを学んできた経験に基づいて、これらの点について検討した。

次に演奏における唱歌の役割である。タブラーの演奏様式には、ガラーナーと呼ばれる6つの代表的な流派がある。それぞれの演奏様式を比較する研究は行われているが、すべてのタブラー奏者に共通して用いられているような演奏の手法、特に即興の方法について深く考察した研究はこれまでになかった。本研究では特に、演奏の中で唱歌をどのように組み立てるのかという問題について、自分自身の演奏経験に基づいて検討した。

三つ目の問題は伝承様式の変化と唱歌学習である。昔は、タブラーの学習は専ら口頭で行われた。このときに唱歌は、「口頭性と書記性の中間形態」としての役割をはたしていただろう。しかし現在、タブラーの伝承は、ノートに唱歌を書き写し、それを見ながら学習することもある。このように、現在の教習において、唱歌の書記性が強まったと言えるだろう。本研究では、このような現代的な状況を踏まえ、音楽の伝承の過程で、唱歌の口頭性という側面が、音楽の伝承において果たす役割の重要性を明らかにした。

本論文は、本論5章および序論と結論から構成されている。序論では、まず研究の対象と目的について述べ、「唱歌」という用語を定義した。その後で、タブラーの唱歌についての先行研究をたどり、それらの研究のなかで、伝承過程における唱歌の役割について十分に検討されてこなかったという問題点を指摘した。最後に、現地調査の経緯と論文の構成について述べた。

第1章と2章では、タブラーについての基礎的な知識をまとめた。第1章では、まずタブラーという楽器がいつ頃からどのように使われてきたのかをたどった。次に楽器の構造、奏法と唱歌の対応関係についてまとめた。第2章では、タブラーの流派について概説した。北インドのさまざまな地域の宮廷で、さまざまな様式が発展したこと、またそれぞれの様式の特徴について説明した。

第3章ではタブラーの奏法を学習するときに、唱歌が果たす役割について検討した。まず学習の段階が進むにつれて、唱歌がより重要な役割を果たすようになっていくことを、自分の学習体験に基づいて、具体的な例を示しながら説明した。その上で、唱歌を使ってタブラーの学習することの意味や効用について分析した。その結果として、唱歌を用いた学習には「肉体的確信」「携帯移動可能性」「固有の音楽性」という3つの効用があることを指摘した。

第4章では、タブラーの演奏において、唱歌がどのような役割を果たすのかについて検討した。まずタブラーの演奏様式が、伴奏の場合と独奏の場合とでどのように異なるかを説明した。次に、楽器をたたく行為ではなく、唱歌を唱えたり、歌ったりする行為を通してパフォーマンスをする様式が発展したことを指摘した。最後に、即興演奏において、唱歌が果たしている役割について検討した。その結果、自分が即興演奏をするときに強調、ひっくり返し、息継ぎという3つを用いていることが明らかになった。また、カイダの演奏の時にはこれら3つすべてをバランスよく用いて唱歌を展開するのに対して、レーラーの時には強調を、さらにペシュカルの時には息継ぎを多用する傾向があることを示した。

第5章では、タブラーの演奏技術の伝承様式が、現在どのように変化しているのかについて検討した。まず、昔は、タブラーの演奏技術は、口頭のみで伝えられてきたのに対し、今日では書かれた唱歌を見て練習する手法が使われる機会が増えてきたことを明らかにした。その上で、タブラーの演奏技術の伝承において、現代においても唱歌の口頭性という側面が重視される必要があるという点を指摘した。

(総合審査結果の要旨)

本論文は、北インド古典音楽（ヒンドゥスターニー音楽）の代表的な打楽器であるタブラーにおける唱歌（しょうが）が、音楽の伝承および演奏に本質的かつ積極的な役割を果たしていることを、執筆者自身の豊富な演奏経験と教習経験、および現地調査にもとづいて記述・考察したものである。ここで唱歌という語は、楽器音を言語音におきかえて唱える習慣ないし現象の総称として用いられており、タブラーではボール**bol**と呼ぶ（本論文の中では一貫して「唱歌」の語が用いられる）。

本論は五章からなる。第一章ではインドにおける唱歌の起源、タブラーの構造、タブラー以外の打楽器の唱歌との関係を概観する。第二章ではタブラーの六流派（ガラーナー）の音楽的特徴と流派の現状を概観する。第三章、第四章では学習の場、演奏の場における唱歌のはたらきを詳細に論じる。第五章では、近年の伝承の場が徒弟制度的なガラーナーから学校教育へと移行していることから、唱歌の伝承に書記性の要素が加わっていることを指摘し、今後は口頭性と書記性の両者が教習の場で生かされるべきことを展望する。

本論の中核をなす第三章、第四章の記述には、執筆者のキャリアと調査の成果が十分に生かされており評価すべきオリジナリティがある。ここで執筆者は、タブラーの唱歌が、打法を身につけるための単なるステップではないこと、すなわち学習が進めば進むほど唱歌の役割が増大し、即興演奏を旨とするタブラーの演奏技法全体、ひいては音楽様式全体が成立するための不可欠な条件となることを論じた。このように、音楽を身体化する学習方法が音楽様式の成立・継承と相関性をもっている様相を、タブラーを事例に鮮やかに示したことが、本研究の重要な成果である。執筆者が準備した、自身の即興演奏を収めた録画（付録DVD）とそれに基づく分析は、タブラーの技法解説として、この議論のために有効に機能した。

本研究は、世界各地に認められる、唱歌に類するソルミゼーション現象の研究一般に資する有益な事

例研究とみてよい。しかし本論文のなかで、そうした研究史上の位置づけ、ないし理論化に向けた議論が十分に展開していないことは惜しまれる。また、演奏の場におけるタブラー奏者と他の演奏家あるいは舞踊家との相互コミュニケーションの実態と唱歌との関わりについても、それが演奏家自身によってはじめて語られ得ることを考えると、いっそう具体的で詳細な分析が求められた。しかし、上記の問題点は、今後の執筆者の研究展開によって遠からず解決されることが十分に期待できる。正確かつ平明な日本語で書かれた本論文は、評価すべき上記の成果とあわせて、演奏家＝研究者としての執筆者の力量と勉学の成果を十分に示しており、博士学位にふさわしい内容を備えていると認められるので、合格とする。